The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ウイリアムズの文学社会学
Author(s)	吉澤, 弥生
Citation	年報人間科学. 1999, 20-2, p. 459-474
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4284
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ウィリアムズの文学社会学

吉澤弥生

〈要旨〉

レイモンド・ウィリアムズ（1921-87）は、文学をメインに、演劇、メディア、ポピュラーカルチャーなどさまざまな領域を「社会学」的に分析した、イギリスの文化研究者である。本稿の主眼は、その中でも彼の文学研究の方法を理論と実践の両面から検証し、その諸特性を整理することに置かれている。

ウィリアムズの文化研究においては、「形式」と「感情の構造」との相互関連が重視される。「形式」は諸個人と社会の関係である。また「感情の構造」はその時代の意味や価値であり、人々の経験を特徴づけるものである。そして「感情の構造」は、「形式」が媒介となることによって再生産される。

ウィリアムズは文学研究においても、「形式」を生活様式の総体の中でとらえなおすこと、また日常的な領域としての「感情の構造」をその視野に入れることの重要性を主張する。また一方で、彼の実際の文学批評、とくに本稿でとりあげる『田舎と都会』（1973）では、これらの概念に加え「わかる社会」などの彼独自の概念がいくつか援用されている。こうした概念や方法は複雑に絡み合っており、また必ずしも一貫したものではない。だがこれらを包括的にとらえなおし整理することによって、文学社会学あるいは文化研究の方向性を示すことができる。

キーワード

レイモンド・ウィリアムズ
文学
形式
感情の構造
「わかる社会」

0　はじめに

「文学」と「社会」のつながりをどうとらえ、言語化するか。これは文学社会学や一部の文芸批評においてこれまでも取り組まれてきた問題である。だがこの問いは、文学研究に限らず、「さまざまな文化的実践をテクストとみなし解釈する」文化研究一般にとってそもそも避けられない問題であるだろう。本稿でとりあげるレイモンド・ウィリアムズ（一九二一-八七）は、「文学」と「社会」の関係をメインテーマとした文化研究者の一人である。ウィリアムズはイギリスの伝統的な文芸批評の手法を受け継ぎ、文学、演劇、メディア、ポピュラーカルチャーなど多岐に渡る領域で研究をおこなった。現在ではカルチュラル・スタディーズの先駆者の一人としてしばしば言及されるが、それは彼がバーミンガム現代文化研究センターの設立当初の主要メンバーであったことや、後述するようにイギリス「ニューレフト」の社会理論や運動をめぐる論争の前線にいたことによると考えられる。だが、ポストコロニアルやジェンダーの観点からウィリアムズを読み直すというような、カルチュラル・スタディーズから彼へと遡る視線だけでは、ウィリアムズの根本的な問題意識＝文学と社会の関係を理解し言語化しようという強い意志が見えにくいのも事実である。そこで本稿では、ウィリアムズの文学研究の方法論や枠組みを整理することに加えて、彼自身がおこなった文学批評を「批評する」ことも試みる。理論と実践の両面から、ウィリアムズの「社会学的」な文学研究の方法を浮き彫りにするためである。

本稿の構成は以下のようになっている。まず1で研究者ウィリアムズの環境を整理し、2で彼の文学研究の方法を理論と実践の両面から検討する。最後にその特性を整理し、冒頭の問いを探究していくための方向性を示す。

1　ウィリアムズの環境

1・1　文化主義

イギリスは批評という領域がもっとも早く成立し、またそれが社会に広範な影響力を持ち続けてきた場所である。イーグルトン[1984＝一九八八]によれば、独立した「言説の公共圏」としての近代批評は一八世紀以降、その発展過程において解体し、一方では教育という国家的プログラムへ、他方ではジャーナリズムという産業システムへと再編成されていく。そしてこのような基盤の変化を経験しながらも、イギリスの文芸批評は、文学をロマン主義やヒューマニズムの源泉とみなし、さらに「詩」を神聖化するという立場が強力であった。F.R.リーヴィスはこうした伝統の下、アカデミズムとジャーナリズムという二重の基盤を維持しながら、自分たちが「価値ある」とみなした作品を精緻にそして経験的に批評する「実践批評」を推進していた。リーヴィスやT.S.エリオットは、社会全体を覆いつくした「俗悪な」資本主義を批判し、「古き良きイギリス」

の有機的社会やその文化を取り戻すために、「文学」を通じて個人個人が道徳的に良い人間になる必要がある、と考えていた。

このように「文学」と「生（life）」の連続性を強調し、人々の「経験」に訴えながらその「共通の文化」や「共同体」を理想とするような立場は「文化主義」と呼ばれる。ウィリアムズはこの文化主義から、文芸批評という方法、「文化」を「日常的なもの」とする考え方、そして「社会」や「共同体」といった全体的な概念を用いる議論を継承している。またこの立場は、「文学や芸術」以外の諸実践を含めることによって「文化」の意味を拡大することになり、結果的にウィリアムズをはじめとするポピュラーカルチャー研究に向けての大きな一歩となった。

その一方でウィリアムズは、リーヴィスが失われた「共通の文化」という理想的過去を足場にして現代の資本主義・個人主義社会を批判したのに対し、過去ではなく未来の「共同体」すなわち「それほど遠くない、実現可能であるような、社会民主主義的共同体」を理想モデルとして掲げる。さらに、リーヴィスが理想化したような「古き良きイギリス」という「単一の共通文化」は、現代の価値観によって好ましいと選択された一つの文化であったにすぎないとし、「単一の共通文化」ではなく「諸階級の文化」があったのだと考える。このようにウィリアムズは、エリオットやリーヴィスによるエリート主義的で非現実的な現代社会批判に、社会理論としての意義を見いだすことはできなかった。ウィリアムズにとっては、社会民主主義という立場から、自分自身の経験である「労働者階級の文化」およびその歴史的発展を理解し言語化することが至上命題だったのである。そしてこの頃、ウィリアムズのような立場の研究者はほかにもいたが、彼らは「ニューレフト」と呼ばれる、新世代の文学・歴史研究者たちであった。

1・2　イギリスマルクス主義文化理論

一九五〇年代末、一部の左翼系知識人や活動家たちは、経済中心の共産主義および修正主義の労働左派とは異なる「もうひとつの左派」を目指し、「ニューレフト」を自称する。そして、そこでの論争は結果的に「伝統的な意味での政治的運動ではなく、イギリスの文化政治学・文化理論にとっての場を生み出す」ことになった[Dworkin 1997 79]。彼らは、従来のオーソドックスなマルクス主義でもなく、リーヴィスらのような保守主義でもない立場から「労働者文化」を研究しようとした。その先駆けはリチャード・ホガートの『リテラシーの効用』（1957）であり、つづいてウィリアムズの『文化と社会』（1958）、『長い革命』（1961）、エドワード・トンプソン『イギリス労働者階級の形成』（1963）などが挙げられる。

ウィリアムズは『文化と社会』（1958）において、産業革命から今日に至るまでの「文化」概念の変遷を跡づけている。さらに『長い革命』（1961）では、この二〇〇年間の産業・民主主義・文化的変遷をたどると同時に、文化分析の目的は「生活様式の総体」の諸要素間の関連を明らかにすること、と言明している[Williams 1961 41]。当時ウィリアムズはマルクス主義者ではなかったが、文化はその生

産様式との関連によって解釈されるという考え方には共感を示していた。だが、文化実践をその生産関係に還元してしまう俗流マルクス主義文化理論や、ブルジョア文化はプロレタリア文化によって乗り越えられねばならないとする急進的な考え方には異議を表明していた。ウィリアムズは、労働者文化の発展は、社会民主主義的な社会において可能であると考えていた[Dworkin 1997 90-91]。

一方、ウィリアムズに反論したのがトンプソンである。彼は、労働者階級は、資本主義と政治的抑圧とに対する彼らの継続的な「抵抗」にもとづいて形成された、と主張する。そして、ウィリアムズの「生活様式の総体」概念は一枚岩的で歴史性や闘争が欠如しているため不十分であるとし、むしろ文化は「闘争様式の総体」であるという。さらに、スチュアート・ホールもウィリアムズに異論を投げかける。ホールはウィリアムズの「文化」概念を、調和や同質性によって結びつけられたひとつの「全体」であると批判する。ホールにとって「文化」は、「節合」を通して結びついた「差異にもとづく統合」である。また、現代が後期資本主義社会であることを強調し、ウィリアムズの分析には消費者という要素が抜けているとも批判する[ibid. 95-99, 141-154]。こうして、「階級」という争点を中心とした「文化」をめぐる論争は活気を帯び、バーミンガム現代文化研究センターをはじめさまざまな研究機関が設立されるなど、文化研究の裾野は従来のアカデミズムの壁を越えて普及していった。

一九六〇年代後半になると、ニューレフトは新たな局面を迎える。ホールやペリー・アンダーソンなど、ウィリアムズらに続いた世代は、方法論としては西欧マルクス主義（とくにアルチュセールとグラムシ）を採用し、「社会の支配的イデオロギー構造に対抗する文化理論」の構築をめざす。そこでは「階級」から「人種」「ジェンダー」など、個人のアイデンティティ問題へと争点が移行していく。ホールの関心は労働者階級の文化や日常生活の政治学にあったといえるが、一方のアンダーソンはアカデミック寄りでやや急進的な傾向があった。アンダーソンは、ニューレフトやイギリス社会主義者・知識人の伝統に典型的な「経験主義と文学的感性との混合」は、イギリス社会の全体的ヴィジョンを生み出すことを妨げていると批判する。アンダーソンは、経験的リアリティではなく、概念を通じた経験の解釈が必要なのだと考える[ibid. 109-124]。こうして「構造主義」寄りのホールやアンダーソンがニューレフトの前線に立ったことによって、「文化主義」的なウィリアムズやトンプソンは批判の対象となり、論争の周辺部へと追いやられる恰好になった。

しかしながらウィリアムズも、一九六八年以降のニューレフト「第三の道」を再構築しようとする運動に巻き込まれることで、西欧マルクス主義に近づくことになる。彼は「Literature and Sociology」(1971) においてルカーチとゴルドマンの研究（後述する）と自身の研究とを比較検討し、「Base and Superstructure in Marxist Cultural Theory」(1973) では従来のマルクス主義文化理論を検証している。さらに、文化は社会の中で物質的生産力とその社会関係を内包した自律的な領域を形成しているとし、「文化唯物論」を標榜する。このように、この時期ウィリアムズは、最も「文学社会学」

あるいは「マルクス主義批評」と近い距離にあったといえる。

1・3　文学社会学／マルクス主義批評

文学社会学はこれまで、社会学の領域においては周辺的な位置にある。とはいえ、特筆すべき成果がなかったわけではない[1]。織田年和によれば、これまでになされてきた文学の社会学的研究はおおよそ三つに分類される[2]。「第一は文学作品を資料とみなし、それが描いている社会の歴史的理解に役立てようとする」もの。「第二は文学を徹底的に社会現象とみなす」立場。「第三は、作品構造と社会構造とのあいだに相同性をみとめ、それによって個々の作品の特徴を解明しようとする」立場であり、ルカーチやゴルドマンの研究はこれにあたる[織田　一九八四　二一八]。ウィリアムズも一九七〇年代以降しばしば彼らに言及しているが[3]、文学社会学といえばまず挙げられるルカーチとゴルドマンの研究について、少し詳しくみておくことにしたい。

ルカーチは『小説の理論』(1920) において、ヘーゲルの「小説は近代のブルジョア的叙事詩である」という規定を継承する。ただし小説は「神の去った世界の叙事詩」であるため、かつては自明なものであった自我と世界の完結した「全体性」が失われてしまっている。そこで近代人はそれを自ら探求し創造しなければならないが、そのための役割を担うのは芸術、とくに小説である。ルカーチは、個人と世界との統一を表す「全体性」概念とともに、個別的なものにおいて普遍性を表現する「典型」を用いる。小説の作中人物は「典型」として形象化され、それは失われた「全体性」を探究させるように読者を導く。この過程をルカーチは「反映」と呼ぶ。そして、一九世紀リアリズム小説は勃興しつつあるブルジョアについて適切な「反映」を与えていたと評価する。これに対し、二十世紀モダニズム文学は、後期資本主義社会における人間存在の疎外化・断片化を描いているだけで、社会と人間との新たな相互関係の展望を表現していないと批判する。つづいて、ルカーチを継承したゴルドマンの『小説社会学』(1964) では、文学作品の意味的構造とその作品を生み出した社会集団の意識構造とは相同関係にある、という「発生論的構造主義」が提示される。つまり小説は、市場生産制から生まれた個人主義社会における日常生活を文学の次元に転換したものである。ゴルドマンは、現代社会の状況を描きだすことを「反映」と考え、そこに現代文学の意義をみとめている[織田　一九九四　八五-九三]『セルデン　一九九四　五三-五六]。

こうして文学社会学者の多くは「近代ブルジョア文学形式」としての小説に着目し、近代小説の「内容」をその社会的構造との関係において説明する。そしてここに向けられるのが、文学社会学に対する典型的な批判、すなわち「文学を社会の産物とみなす還元論」というものである。ウィリアムズも、上部構造―下部構造モデルにもとづく経済決定論においては「芸術や文学は上部構造に属し、各々の下部構造の『反映』にすぎないとされ、独自性を持った人間の『経験』や『創造』が、即座にかつ機械的にその『階級』へと還元されてしまう」と批判している[Williams 1971 19]。だが問題は、

ルカーチやゴルドマンの結論自体にあるのではなく、むしろその事例研究が「反映論」というかたちで一般化され、必然的に「文学」と「社会構造」という領域区分が保持されつづけてきたところにあると考えられよう。

また、こうした立場では、小説の「内容」は社会構造の「反映」としてイデオロギー的に説明できているが、小説の「形式」の問題は唯物論的立場から問われていない。小説は所与の文学形式とされ、その形式上の変化や発展は考慮に入れられないのである。ウィリアムズも「ルカーチとゴルドマンは『叙事詩と演劇、小説と悲劇は、固有で永久的な性質を持つ』というような、容認された学術的伝統に、究極的には観念論にとどまっている」と指摘する。ウィリアムズも小説とそれを生みだした社会構造との相同関係を見いだす立場をとるが、その際小説の「内容」だけでなく「形式」の変化にも目を向ける。彼は「形式についての分析はほとんど始められていない」とし、こう続ける。「文学形式の分析によって、視点の変化・・・諸関係の変化、意識の変化が直接例証される。そしてそれらの諸変化は・・・現実の社会史と合理的に関連づけられ、基本的諸関係の分析へとつながる」[Williams 1971 26-27]。次ではこの「形式」を含め、ウィリアムズの文学研究を理論と実践の両面から検討することにしたい。

2　ウィリアムズの文学研究の方法

2・1　理論

ウィリアムズは、「文化」と「文学」について次のように考える。文化は生活様式の総体であり、社会の中に深く埋め込まれた、人間活動の様式の総体である。と同時にそれは、芸術や文学と呼ばれてきた特定の領域も含んでいる。また、文化は記号体系の総体であり、「言語」はその体系の基盤をなしている。そして言語のなかで最も「文化的行為」であるのが文学であるが、と同時に文学は社会の中で政治や経済などとならんで存在するものである。このようにウィリアムズは、かつての教条的なマルクス主義文化理論のように文学を上部構造の中に閉じこめたり、リーヴィスらのように文学を「古き良きイギリス」という理想の源泉とみなしたりはしない。文学は、それ自身の物質的生産諸関係を含んだ、コミュニケーション過程の一つなのである。

そしてウィリアムズは自身の目指す「文化社会学」を構想するが、その特性は「形式」と「感情の構造」にみとめられる。それらは相互に関連しつつ、文化と社会の関係を包括的に分析するための重要な概念となっている。それによると、文化社会学は、文学や政治や経済などの「個々の歴史のあいだの関係、すなわち、全体としての組織がとる特定の形式」に焦点を当てる。形式が可視化するのは「感情の構造」である。「感情の構造」は、その社会における文化的

側面を表現する概念であり、ある生活様式を共有する諸個人の経験を特徴づけるものである。また、その社会における「意味や価値」でもある。前述したゴルドマンの「発生論的構造主義」との関連でいうなら、「感情の構造」は、ゴルドマンのいう「意識」ほど教義的なものだけではなく、日常生活レベルでの感情や経験をも包含するものである。そして、その時代の文化の再生産のために「媒介」の役割を果たすのが形式ということになる。ウィリアムズは、「形式（ないしは社会的形式）」を諸個人と社会との関係と考える。また「文化的形式」を、ある種類の芸術に特有な規則や習慣とし、その社会的文脈に応じて再生産されるものと考える。そして、分析上の作業仮説であると強調しつつ、文化的形式を深層から順に「様式（modes）／ジャンル（genres）／類型（types）」と区別する(4)。したがって、形式の変化や発展をみる場合、異なった水準の形式が相互的に変化するという複雑なその発展過程を視野に入れる必要がある。文学形式のさまざまな変化を分析することは、「現実の社会史と合理的に関連づけられ、基本的諸関係の分析へとつながる」とウィリアムズは考えるからである[Williams 1961 43-45][Williams 1971 26-27]。

このようにウィリアムズは、まず「感情の構造」によって、文学社会学ではこれまでほとんど考慮に入れられなかった日常的な領域を視野に入れる。さらに「形式」を生活様式の総体の中でとらえなおし、その媒介としての役割を重視する。ウィリアムズのスタンスは、「文学と社会構造という領域がアプリオリに設定されている」、「日常経験が分析の対象に入れられていない」そして「形式に関しては美学理論に依拠している」という文学社会学の問題、および「形式の変化を文学という領域における内的な発展とみなす」一部のフォルマリズムのそれを、理論的には克服することが可能である。では実践においてはどうだろうか。

2・2　『田舎と都会』（1973）

ウィリアムズの研究傾向に関しては「一九七〇年代後半を転換期とみなすことができる」という見解が一般的である[Hall 1980 63]。それにしたがうと、前期の仕事は、『文化と社会』（1958）や『長い革命』（1961）から『田舎と都会』（1973）に至る、イギリス文学研究が主である。これに対し後期は、『キイワード辞典』（1976）、『Marxism and Literature』（1977）、『Politics and Letters』（1979）、『Problems in Materialism and Culture』（1980）、『文化とは』（1981）などにみられるように、それまでの研究で得られたさまざまな知見を整理し概念化しようという方向に重心が移動する。この一九七〇年代後半といえば、前述したように、ウィリアムズが西欧マルクス主義の影響を受け、自ら「文化唯物論」を標榜していた時期でもある。言い換えれば、イギリスに特徴的な「経験」重視の歴史的文学研究という伝統からやや距離を置いていた時期である(5)。このようにみると、ウィリアムズの研究傾向の「転換」は、文化主義から文化唯物論へのシフトと言い表すこともできるだろう。

本稿で検討するウィリアムズの批評は一九七三年に出版された

『田舎と都会』である。これはウィリアムズの文学批評の集大成であり、彼の著作中もっとも「社会学」的な作品といってよい。普通の読み方をすれば、『田舎と都会』の最大の成果は、イギリス文学に登場する「田舎」と「都会」という対立イメージが決して固定的なものではなく、さまざまなイデオロギーを背景にしながら歴史的に変化し続けているということを数多くの作品の批評を通じて明らかにした点にある。しかしながら本稿の関心はウィリアムズの批評方法にあるため、ここでは『田舎と都会』において用いられている、彼独特の分析概念やその方法を抽出することにしたい。まずは前節でとりあげた「形式」分析、次いでそれと関連する「言語の共同体」概念である。これらは一九～二十世紀の小説の批評に見いだすことができる。

まず「形式」分析に注目する。以下、ウィリアムズの議論をまとめよう。一九世紀初頭のジェイン・オースティン（一七七五-一八一七）の小説に登場する人物は、田舎の地主など上層の人々に限られている。ところが一九世紀中頃のジョージ・エリオット[6]の小説において、それまでは小説に描かれてこなかった「田舎の民衆」が登場する。しかし、そもそも小説は「ブルジョアの言語とその社会を基盤とする文学形式である」ため、その中に「語り手の分析的方法」と「田舎の民衆の非道徳的ともいえる会話や行動」とを共存させることは難しい。そして、このような「語り手」と「日常会話」との語法上の矛盾は、「エリオットが受け継ぎ、発展させた小説の形式にある矛盾である」。「エリオットの場合・・・対立があり、階級があり、感情と言葉の分裂、対照があるという認識が、用語の統一を不可能にしている」[Williams 1973 169（原書）＝一九八五　二二九（訳書）]。このようにウィリアムズは、一九世紀の「道徳的行動をこととするブルジョア・上流階級」と「道徳的で分析的な語り口に支えられた小説」との相同性を認めている。と同時に、この小説という形式が民衆の言語を取り入れようとすると、語り手の視点の一貫性が揺らいだり、あるいは結局は民衆の日常会話が道徳的な語り手の語法に回収されてしまったりといった、形式上の破綻が生じることを指摘している。

つづいてウィリアムズは、一九世紀ロンドンを舞台にしたディケンズ[7]の小説を論じる。ここではエリオット批評の場合とは少し趣が変わり、ディケンズの小説の形式と一九世紀ロンドンの「都市の形式」との相同性が、多くのページを割いて綿密にたどられている。以下はその概要である。「ディケンズのこれまでになかったような小説の創造は・・・一般に都市のあり方と直接につながっている」。「ディケンズが究極的にロンドンに見たものは・・・彼の小説の形、つまり小説の語り口に、性格描写の方法に、典型化の手際にある。ここでは都市体験が小説の方法なのか、小説の方法が都市体験なのかなどということはどうでもよいことであって、肝心なのはディケンズの眼（もちろんただ見るだけでなくたえず劇化しながら見る眼なのだが）がすなわち小説の形なのだということである」。「人物の名前に道徳的な意味合いを持たせるやり方」や「いろいろな家といろいろな人との類似を徹底的に、滑稽になるまでつきつめ」るやり

方など、「彼の手にかかると制度や世態は人間か自然現象のような観を呈する」。「都市は同時に社会的事実でもあり人間模様でもあるものとして示される」。そして「新しい社会的・経済的諸力がはらんでいる現実の矛盾」に直面していたディケンズの関心は、「相次ぐ先例のない変化と、原型をとどめないほど変わってしまった風景の中で、人間的な感覚と優しさを生かしておくことにあった」[ibid. 154-164=二一〇-二二二]。

このようにウィリアムズは、ディケンズの小説の内容だけでなくその形式に、すなわち描写の綿密さや擬人化などの技法、語り口に注目している。そして、それらを駆使することによって「人間と社会との関係を人間的なものとして描く」ディケンズの小説の形式を媒介として、ウィリアムズは一九世紀の都市ロンドンを想像しているのである。ロンドンはすでに、政治的権力だけでなく「英国全体の社会的現実の圧倒的な部分を生産・再生産」する都市であった。また、牢獄や境界や市場、富と貧困、善と悪が混在し、「人々を結びつけると同時に混乱に突き落とす」ような場所であった[ibid. 152=二〇六]。ディケンズの小説の形式は、このように混沌とした都市社会の混沌から秩序を見いだすための「ものの見方」を積極的に導くものである。こうしたウィリアムズの分析は、ディケンズの小説が内容においても形式においても、一九世紀社会構造のたんなる「反映」ではないことを示すことに成功している。

そしてウィリアムズは、ディケンズ以降の一九世紀小説についてこうつづける。「写実性と、一見自意識的な作者の解説を排除したかに見えるあり方」は「記述的・具象的で入念な観察をこととする自然主義に立つものであり、そこからは、意識にまつわるさまざまな問題は・・抜け落ちてしまっている」。「こうしたトーンは新しい都市体験のものである」[ibid. 226=三〇二]。

つづいて、ジェイムス・ジョイス[8]の『ユリシーズ』[9]第四挿話と第八挿話の一部をとりあげ、都市ダブリンを歩き回る主人公ブルームの「内的独白」部分について次のように分析する。『ユリシーズ』の中で見いだせる「意識は、強烈かつ断片的で、根本的には主観的なものであるが、主観的ではあっても他者を包含するもの」であり、「他者はここでは都市の建物や騒音や光景や匂いと一緒にこのひとつのめまぐるしく動く意識の一部となる」。「行動のさまざまな力は内的なものになり、したがってある意味ではもはや都市はなくなり」、「実質的な現実、都市の生き生きした多様性は、歩行者の心の中にあるもの」となる。「いわゆる『意識の流れ』や『内的独白』は・・・たとえ直接的に美的なレベルにとどまっているように見える場合でも、生活と社会の基本的なモデルに深くつながっている」[ibid. 242-245=三二四-三二八]。

ウィリアムズによれば、ディケンズ以降、都市を描いた小説は、「観察と記述」にもとづく「自然主義」が一般的となっている。そしてそこでは作家の「意識」が一切排除されたようにふるまわれており、ディケンズのように「ものの見方」を積極的に示すような形式はみられないという。そしてこの「客観性」を目指す語り口が、一九世紀末の都市体験や都市のあり方そのものなのである。ところが

二十世紀初頭になると、ジョイスの用いた「意識の流れ」の手法が、その時期の都市を生きる民衆の「根本的に変容した知覚とアイデンティティの型」を体現することに成功したとウィリアムズはいう。そして、この「意識の流れ」は『ユリシーズ』の小説形式に限った話ではなく、「めまぐるしく、断片的で、多様」な都市生活の基本的な形式そのものであると考える。

以上、一九～二十世紀小説を対象におこなわれたウィリアムズによる「形式」分析を抽出し、整理してきた。しかしながら、ここでひとつ指摘しておかねばならない。それは、ディケンズ以降の小説、とくに『ユリシーズ』の「形式」分析が十分でないということである。量にして十ページ程と少ないうえに、ディケンズ批評ほど綿密におこなわれてはいないのである。

次に『田舎と都会』から抽出するのは、「言語の共同体」ともいうべき一連の概念である。それらは、対象とする小説の言葉や形式を分析することによって抽出される「意識の共同体」や「言語の共同体」のようなもの、ということができる。

まず「わかっている社会（known community）」と「わかる社会（knowable community）」という対概念をみてみよう。ただしそれは、エリオットからハーディへという地方小説批評においてのみ「対」で用いられている。前述したエリオットの小説の矛盾についてウィリアムズは次のようにいう。「『わかる社会』とは共通一般の生活であり、エリオットはそれを記録」しようとする。「しかし『わかる社会』と『わかっている社会』とは別物」であり、『わかる社会』を描くには「別の関心、別の感受性と結びついた別の言葉が必要」なのである。こうして語り手の「行動に道徳的力点を置くやり方は・・・小説の『わかる社会』と齟齬をきたさざるをえない」[ibid. 168-173＝一二八-一三三]。言い換えれば、「わかっている社会」は文学上の伝統にのっとった言語であり、一方「わかる社会」はそれに対抗するものとして現れる、いわば「日常言語」である。エリオットは「わかる社会」と「わかっている社会」とのあいだで揺れ動いていたが、結局一九世紀末の民衆の「わかる社会」を小説の中に登場させることに失敗したのである。つづいてウィリアムズは、エリオットのかわりにこのことに成功したのがトマス・ハーディ（一八四〇-一九二八）だという。ハーディは「観察者でもある参与者」として「田舎社会の構造に対する社会全体の全般的な影響だけでなく、田舎社会の内部に進行するさまざまな過程やその複雑な効果を克明に記録し解明した」とウィリアムズは高く評価する[ibid. 207＝二七八]。このように田舎社会を舞台にしたエリオットからハーディへという小説の系譜の分析では、「わかる社会」は「田舎の民衆の言語」と結びつけられ、「わかっている社会」としてのブルジョア文学の伝統に対抗するためのひとつのイデオロギーとして機能している。

これに対し、都市小説批評における「わかる社会」は「わかっている社会」とセットでは用いられない。まずディケンズ批評ではこう述べられている。「都市は大きくなり・・・労働の分野では分業が進行し、複雑さが増していた。社会階級内部のまた階級相互の関係

は一変し、危機的な状態にあった。そしてこういった変化のなかにあって、社会をそっくり、すみずみまで知ることができるという考え方はますます受け入れがたいものとなっていった」。とはいうものの「社会がわかるかどうかは、やはり意識の問題であり、持続的な、また日常的な経験の問題なのである」[ibid. 166＝二二三-二二四]。つまりウィリアムズにしたがえば、複雑さを増してゆく都市の中には「わかるもの」と「わかりえないもの」があるが、それらの総体が都市の日常経験である。この文脈で考えるならば、「わかる社会」は、人々の「日常の意識の共同体」を基盤にしたもの、ないしは「日常言語の共同体」といえる。ただし意識といってもゴルドマンのいうような狭義のそれではなく、ウィリアムズが設定した「感情の構造」をも含んだ広い意味での「意識」である。とするとディケンズは、そうした混沌とした都市の日常生活の中から、人とものとの新たな関係をつくりだすための「ものの見方」を示し、人々の日常の意識の中にそれを持ち込むこと、「わかるようにする」ことを試みたということになる。このように、ディケンズ批評での「わかる社会」は、伝統的な文学上の約束事に対抗するためのものではなく、現在あるいは未来において構成される「意識の共同体」「言語の共同体」を意味していることがわかる。

つづいてウィリアムズは『ユリシーズ』に対し次のようにいう。『ユリシーズ』ではそれ以前の「リアリズム」的作品では見いだすことはできなかった「支配的な社会の約束、すなわち現実の歴史の分離と縮小の約束によって隠され歪められていた、人間的な、広大な言語の流れ」がとらえられている。「唯一の『わかる社会』は、めまぐるしく動き、分離した、さまざまなかたちの意識が抱えている欲求・欲望の中にある」。つまり『ユリシーズ』以前は、リアリズムという「観察とコミュニケーションの法則と約束」によって、人々の日常の意識や言語つまり「わかる社会」をとらえることはできなかった。しかし『ユリシーズ』には、都市を生きる人々の日常言語、「わかる社会」が現れているということである。しかし続けてウィリアムズは、『ユリシーズ』後半と『フィネガンズ・ウェイク』[10]に現れるのは「普遍的言語」であるとし、それが「日常言語」を脅かすものであることを暗示する。「強烈な主観性をみとめたうえで形而上学的あるいは心理学的な「共同体」が想定され・・それは、たとえ抽象的な構造の中だけであるにせよ「普遍的」なものとされ、現実の「社会」は・・・偶然的かつ二次的なものとして排除されるのである。歴史の中でさまざまに変わりうるものである「個人と社会」の問題は、「社会」が一個の抽象となり、集団的なものがもっとも内的な経路を通って流れるものとされることによって定義づけられる」。そしてウィリアムズは「普遍的言語」のかわりに、二十世紀の都市を「分断や破壊」ではなく「変革」に向かわせるような文学を支持する。すなわち「個人と個人との関係を見据え、新しい集団としての意識を創造するような文学」である[ibid. 242-246＝二二一-二二九]。

このように、『ユリシーズ』で発見された、人間の欲望や欲求をも含んだ「日常言語」は、それまでのリアリズムの伝統を覆すもので

ある。『ユリシーズ』の「意識の流れ」は、リアリズム小説の形成と深く関係するブルジョア階級の形式に縛られることなく、都市の民衆の日常生活の形式をとらえることに成功している。ウィリアムズが『ユリシーズ』を評価するのはこうした点においてである。その一方でウィリアムズは、『ユリシーズ』以後の「普遍的言語」を危惧し、そのかわりに「変革」の文学を目指す。つまりウィリアムズは、一九世紀ロンドンにおいてディケンズがそうしたように、二十世紀小説が、個人と個人ないし個人と社会の新たな「関係のあり方」や「ものの見方」を示すことを期待しているのだ。これはウィリアムズの社会民主主義という立場のあらわれともいえる。だが彼が二十世紀後半の社会の複雑さの中に単純なマルクス主義的対立を想定していたとは考えにくく、地方小説の系譜を分析したときの「対ブルジョア」という含意は、『ユリシーズ』批評においては希薄であろう。

3　まとめと展望

以上、ウィリアムズの文学研究の方法を理論と実践の両面から検討してきた。これを通じて、文学の社会学的研究の陥りがちな問題点とともに、ウィリアムズの方法の独自性や画期的な点を見いだすことができた。最後に、それを応用・展開させることを念頭に置きつつ、ウィリアムズの「形式」分析および「言語の共同体」概念を整理したい。

今後の展開の方向としてまず考えられるのは、文学社会学に「形式」分析を取り入れるというものである。「形式」を媒介とみなすウィリアムズの考え方は、これまでの文学社会学にはみられなかった視点である。従来の内容分析だけでなく、この視点を加えることで、文学と社会の相互関係をより多角的にとらえることができるだろう[11]。だが前述したように、ウィリアムズがおこなったディケンズ以降の小説の形式分析は十分ではない。『ユリシーズ』を論じた部分は十ページ程、『フィネガンズ・ウェイク』に至ってはその名前が挙げられているだけである。そのため、ウィリアムズは『ユリシーズ』後半から『フィネガンズ・ウェイク』を「都市の発展を、また行動し思考し語る人間を描く小説の発展」の危機をしるす作品といっているが、それが具体的にどのようにしてそうなのか、わからないのである[ibid. 244=三二七]。したがって、二十世紀の小説形式の分析を、まずはウィリアムズの扱わなかった『ユリシーズ』後半を、実際に分析する必要がある[12]。そうすることによって、「形式」分析の意義をより明確に示すことができるだろう。

もう一つの展開の方向は、「わかる社会」を、文化研究において応用するものである。『田舎と都会』の検証でも示したとおり、「わかる社会」は対象によって使い方が異なっていた。すなわち、エリオットからハーディへの地方小説の分析においては、「わかる社会」は「対ブルジョア」という色合いが濃かった。また『ユリシーズ』批評での「わかる社会」は、「わからない」ものである「普遍的言語」と対立するものと暗示されていた。これに対しディケンズの小説批評では、それは何かに対抗するためのものというより、現在や未来に

おける「関係のあり方」や「ものの見方」を示すための「意識の共同体」として用いられている。そして、展開の方向というのは、この「わかる社会」を、「記述すること」や「解釈すること」と関連する問題としてとらえるものである。ウィリアムズにしたがうなら、「意識の共同体」は「わかりえないもの」をも含んでいるが、文学などの形式や文学における形式を媒介として言語化されることによって、その中のある部分は「わかる社会」として浮かび上がる。このように「テクストを書く」ということへの関心から、実際にウィリアムズの「わかる社会」がとりあげられている。「現代社会の知識と、それを表現する・・記述の方法とは、実は緊密に結びついているのだということを最も鋭く言明したのは、おそらくレイモンド・ウィリアムズであろう」[マーカス　1986＝一九九六　三〇七]。

いずれの展開の方向においても、ウィリアムズの「形式」を重視する視線がその重要な鍵となっていることは確かである。また冒頭でも述べたが、広い意味での文化研究が「テクストを解釈する」という手続きをとる限り、「文学」と「社会」という関係は決して無視できない主題である。本稿で検討したウィリアムズの研究は、文学に限らず、より広い文化領域に対する研究において参照され応用される意義を持っているだろう。

注

(1) 近年の文学社会学について。特筆すべきはブルデュー『芸術の規則』だろう。彼はそこで、フローベールの小説『感情教育』を対象に、文学作品がその社会構造との相互作用において形成される過程を明らかにした。この『芸術の規則』は、「文学」という領域を「科学的に分析する」試みであり、ひとつの事例研究として評価されてよい。だが、「ブルデューの『文学場』分析には、『読者』もしくは『鑑賞者』の問題が希薄」という側面がある[長谷　一九九六　二〇二]。

(2) 一方で織田は、こうした試みとは異なり、作田啓一、富永茂樹らを中心とした「文学からの社会学」の試みは、ルネ・ジラールの考え方を導き手として「文学に依拠し文学を出発点とする」立場から「社会学的思考の発見そのものを可能にする」ような方向を目指している、という[織田　一九八四　二一八]。

(3) ウィリアムズは、前出の1971年と1973年の論文のほかでも、「文化の歴史的研究の伝統」として彼らの業績について言及している。ウィリアムズは、ルカーチの研究を、ある社会や時代の基礎的な「構造」がまず確定されたうえで現実の作品の中にその構造の「反映」を探しだそうとする立場とみる。またゴルドマンの研究は、芸術作品における社会関係の分析であり、そこでは「反映」という語の意味合いが「媒介」に変わっているが、社会構造があらかじめ設定されている点では同じであると指摘している[Williams 1981 21-25＝一九八五　二三-二七]。

(4) 「様式／ジャンル／類型」について。「様式」はまったく異なった社会秩序においても存続する（例：演劇、音楽、語り）。「ジャンル」は、様式に比べより時代区分的な社会秩序間の変化に決定的に依存する（例：悲劇や喜劇、叙事詩やロマンス）。「類型」は、

ある時代の変化した社会的性格に照応する（例：ブルジョア演劇、リアリズム小説）。

(5) イーグルトンは『田舎と都会』について、ウィリアムズの著作中「マルクス主義の視点から議論が展開されているのはこれをおいて他にない」といい、生産的で成熟した著作として高く評価する[Eagleton 1976＝一九八〇　五六]。またホールは、「より『伝統的な』文学研究からの訣別が、『田舎と都会』においてみられる」という[Hall 1980 64]。

(6) ジョージ・エリオット（一八一九-一八八〇）。『田舎と都会』では『ミドルマーチ』(1859)、『フロス河畔の水車小屋』(1869) などが論じられる。

(7) チャールズ・ディケンズ（一八一二-一八七〇）の『ドンビー父子』(1848) と『リトル・ドリット』(1855-7) がおもに論じられる。後出のハーディと同様、ディケンズは「大衆小説」作家と位置づけられ、「偉大なるイギリス文学」史において正当な扱いを受けてきたとは言いがたい。ウィリアムズが彼らを文芸批評の対象としてとりあげたこと自体、画期的であったといえる。

(8) ジェイムス・ジョイス（一八八二-一九六五）。二十世紀前半を代表する作家のひとり。主な著作は『ダブリン市民』(1914)、『若い芸術家の肖像』(1916)、『ユリシーズ』(1922)、『フィネガンズ・ウェイク』(1938)。

(9) 『ユリシーズ』は、あっさり言ってしまえば、文学青年スティーヴン、新聞社の広告取りブルーム、その妻で歌手のモリーの三人を中心に、一九〇四年六月一六日のダブリンの一日を事細かに綴った小説である。語り手や文体の点から『ユリシーズ』全一八挿話を見渡すと、基本的には第十挿話を境に、前半の「初期の文体」と後半の「新しい文体」に分けることができる。初期の文体とは、「三人称の語り」「対話」「自由間接体」「内的独白／意識の流れ」の要素からなり、この規範的文体によって読者はイメージを構築し、安定した世界を思い描くことができる。ところが後半の文体は、初期の文体の規範を脅かす「文体の実験場」と化し、物語の「内容」よりもその「語り方」が前景化することになる。

(10) 『フィネガンズ・ウェイク』は、文法や構文規則を破壊した文章、意味よりも言葉の響きやリズムの重視、難解でナンセンス、などといった評判によって有名な作品である。その解釈は実にさまざまだが、「酒場の親父とその女房と子供」が見る夢の世界の物語ということもできる[柳瀬　一九九二　二三]。

(11) ただしいうまでもないことだが、ウィリアムズは「内容と形式」という区別を前提としているわけでもなく、「形式とは何か」などの議論をしているのでもない。

(12) 『ユリシーズ』後半を、「形式」分析を中心に検証した論文を別に準備中である。

参考文献

Bourdieu Pierre 1992 *Les regles de l'art* Seuil（石井洋二郎訳　一九九五-一九九六　『芸術の規則』Ⅰ・Ⅱ　藤原書店）

Clifford James& Marcus George 1986 *Writing Culture* Univ. California Press（春日直樹ほか訳　一九九六　『文化を書く』　紀伊国屋書店）

Dworkin Dennis 1997 *Cultural Marxism in Postwar Britain* Duke Univ. Press

Dworkin D.L.& Roman L.G.(ed.) *Views Beyond the Border Country; Raymond Williams and Cultural Politics* ROUTLEDGE

Eagleton Terry 1976 *Criticism and Ideology* Verso（高田康成訳　一九八

○　『文芸批評とイデオロギー』　岩波書店)
Eagleton Terry 1984 *The function of Criticism* Verso（大橋洋一訳　一九八八　『批評の機能』　紀伊国屋書店)
Eagleton Terry (ed.) 1989 *Raymond Williams; Critical Perspectives* Polity
Goldmann Lucien 1959 *Le Dieu cache* Gallimard（山形頼洋・名田又夫訳『隠れたる神』　一九七二　社会思想社)
Goldmann Lucien 1964 *Pour une sociologie du roman* Gallimard（川俣晃自訳　一九六九　『小説社会学』　合同出版)
Hall Stuart 1980 "Politics and Letters" Eagleton Terry (ed.) 1989 *Raymond Williams; Critical Perspectives* Polity
Joyce James 1921 *Ulysses*（丸谷才一・永川玲二・高松雄一訳　一九九六-一九九七　『ユリシーズ』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　集英社)´（柳瀬尚紀訳　一九九六-一九九七　『ユリシーズ』一～三・四～六・十一　河出書房新社)
Joyce James 1938 *Finnegans Wake*（柳瀬尚紀訳　一九九四　『フィネガンズ・ウェイク』　河出書房新社)
Lukacs George 1920 *Die Theorie des Romans* Gallimard（原田義人・佐々木基一訳　一九九四　『小説の理論』　ちくま学芸文庫)
O'Connor Alan 1989 *RAYMOND WILLIAMS:* Writing, Culture, Politics Basil Blackwel
Selden Raman 1989 *Practising Theory and Reading Literature*（鈴木良平訳　一九九四　『現代の文芸批評』　彩流社)
Williams Raymond 1958 *Culture and Society* 1780-1950 Chatto&Windus（若松繁信ほか訳　一九六八　『文化と社会』　ミネルヴァ書房)
Williams　Raymond 1961 *The Long Revolution* Chatto&Windus（若松繁信ほか訳　一九八三　『長い革命』　ミネルヴァ書房)
Williams　Raymond 1971 "Literature and Sociology" 1980 *Problems in Materialism and Culture* Verso
Williams　Raymond 1973 "Base and Superstructure in Marxist Cultural Theory" 1980 *Problems in Materialism and Culture* Verso
Williams　Raymond 1973 *The Country and the City* Chatto&Windus（山本和平・増田秀男・小川雅魚訳　一九八五　『田舎と都会』　晶文社)
Williams　Raymond 1981 *Culture* Fontana（小池民男訳　一九八五　『文化とは』　晶文社)
Williams　Raymond 1989 *The Politics of Modernism* Verso
織田年和　一九八四　「ルネ・ジラールと文学の社会学の方法」『目覚と懐疑』　筑摩書房
織田年和　一九九四　「マルクス主義批評・社会学的批評」『文芸批評を学ぶ人のために』　世界思想社
長谷正人　一九九六　「文学と芸術の社会学」『文学と芸術の社会学』　岩波書店

Williams' Sociology of Literature

Yayoi YOSHIZAWA

The relation of "Literature" and "Society" is basic problem not only for sociology of literature but also for the studies of cultural "text" over all. Forward the exploration of the problem, for the first, this paper aims to reconsider the literary studies by Raymond Williams (1921-87), from both sides of his theory and practice.

In cultural analysis, Williams applied original conceptions: "forms" and "structure of feeling". "Forms" meant relations of individual and society, and they perform the "mediation" that reproduces meanings and values in the society. "Structure of feeling" meant something like meanings and values or a kind of cultural side of the society. Applying them in literary studies, he attempted to resolve some aporia of hitherto literary studies.

In The Country and The City (1973), Williams criticized some 19-20th century novels in the point of "forms". Furthermore he used some his original conceptions, named "knowable community", and so on. Though they were very complicated and not necessarily perfect, they seemed to have potentialities for development of the sociology of literature.

Key words

Raymond Williams
literature
forms
structure of feeling
"knowable community"